文学にあらわれた「立山」
－『金草鞋』と『諸国名山往来』－

奥澤真一郎

はじめに

富山県［立山博物館］では、平成24年度に春季企画展「文学にみる立山」を開催した。この企画展では、『大日本国法華経験記』や『今昔物語集』にはじまる「立山に地獄あり」「立山は亡き人に会える山」といった、オーソドックスな「立山地獄観」が、時代とともにどのように変容していったかをテーマのひとつとするものであった。古来、「・・・而るに昔より伝へ云ふ様、日本国の人、罪を造りて多く此の立山の地獄堕つと云へり・・・」（『今昔物語集』巻十四「修行僧至越中立山会小女語第七」）とおそれられた立山地獄はその後、謡曲『善知鳥』や、近世以降の『諸艶大鑑』巻八（井原西鶴著、貞享元(1684)年）、『春雨物語』（上田秋成著、江戸後期）等の浮世草子や戯作文学が成立していく過程で、仏教が幕藩体制に組み込まれたことや、儒教の合理精神が仏教的厭世観を凌駕したこと、そして出版文化の隆盛により仏教説話が一般文芸に解放されたことなどの影響を受けて変容しつつも継承され、十返舎一九の『諸国道中金草鞋』（立山博物館蔵、文政11(1828)年、以下、本稿では『金草鞋』とする）にいたった。一九が描いた『金草鞋』の第十八編「越中立山参詣紀行」には、従来の仏教的観念にもとづく「立山地獄」よりも、観光資源として、また文学作品の舞台となる「異界」「魔界」としての、いわゆる「茶化し」「パロディ化」された立山地獄がみられ、それは近世後期の江戸庶民の「立山地獄観」にも色濃く反映されていったと考えられる。[1)]

さて、本稿では以上のことをふまえ、あらためて文学作品の紹介として、『金草鞋』第十八編や他編に描かれた「立山地獄」に関する部分をとりあげることで、近世後期随一の戯作作家である十返舎一九の地獄観がより明らかになればと考える。また本稿後半では、「越中立山参詣紀行」の成立以前に著された往来物のひとつである、『諸国名山往来』について、その翻刻を交えて紹介していく。

なお、ここで取りあげた『金草鞋』に関しては第十八編「越中立山参詣紀行」は富山県［立山博物館］所蔵のものを使用した。またその他編については早稲田大学図書館所蔵の、明治期の版本を使用させていただいた。ただ『国書総目録』の『金草鞋』は五編「木曽路之巻」、二十編「羽州最上郡羽黒山」、二十三編「江の島箱根七湯」とある。同大学所蔵の各編のものは、四編の内題が「木曽路巻」、七編は内題なし、十九編は「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」となっていて、違いがあるので、『金草鞋』に関しては、便宜上それぞれ「越中立山参詣紀行」、「木曽路之巻」、「羽州最上郡羽黒山」、「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」と表記したので、ご了解願いたい。

1.「立山に地獄あり」

１－1.『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」にみる立山地獄

本章では、『金草鞋』に採録されている、「立山に地獄あり」という「今昔物語集」以来、巷間広まっ

た伝承をモチーフとした部分について述べる。近世文学の中で立山地獄は「浮世」と「義理・人情」、「カネ」そして「イエ」との葛藤の果ての「現世こそが苦の世界」という近世的地獄観によって、「茶化し」「パロディ化」の対象とされていったことは、既に指摘されている。[2] ここではまず『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」の18丁目を引用する。

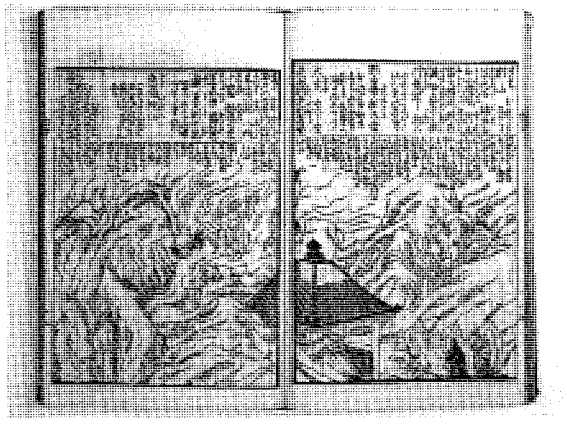
「…これは／＼すさまじいけしきだ。これがほんのいきたぢごくといふのだ。（略）…」

「なんとこゝのぢごくへは、くる道がしれてゐるが、ほんとうのぢごくへはどこからゆくであらう」

a「ほんとうのぢごくは、ぢのそこにあるといふから、むくらもちのやうにむぐりこんでゆくのだろう。らいねんは、ぢごくのどうちうきがほんに出るそふだから、それを見たらよくわかるだらう」

（傍線、アルファベット記号筆者）

註：むくらもち　　もぐらのこと



『諸国道中金草鞋』第十八編
（富山県［立山博物館］蔵）

すさまじい自然景観から、かつてあれほど恐れられた立山地獄は、一九によって本当の地獄ではないと喝破された。しかし結局、一九自身も自分が死後にどこへ行くのかといった、漠然とした不安はぬぐい去ることが出来ず、地獄そのものの存在も否定していないというのが、この一文における一九の地獄観の解釈であった。[3]

1－2.「羽州最上郡羽黒山」にみられる地獄

さて、このような一九の地獄観、立山地獄観は、『金草鞋』の他編においても明確にあらわれている。ここでは「羽州最上郡羽黒山」から、やや長くはあるがその部分を引用する。

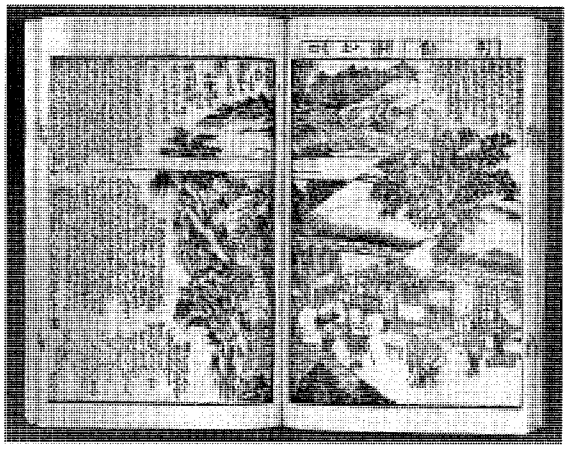
牛首　　浄土口

さんけい

なんと、ゑつちうのたて山にも、このおやまにもぢごくがあるといふことだが、わしはがつてんがいかぬ。b　ぢごくはぢのそこにあるではないか。それだからしんだものをつちのなかへうめると。それからむぐらもちのやうにむぐりこんでぢごくへもごくらくへもゆくのだから、どふもこの山にぢごくはありそふもないことだ。そしてわしがかんがへて見るに、しんだときおてらへそうれいをやるのは、ぜにがいつてりくつがわるい。それよりか川へでもうみへでもながしてしもうほうがりかたがよい。c　なぜといふに、ぢごくもごくらくもぢのしたにあるだろう。また、りうぐうもうみのしたにあるだろう。そふして見ると、地獄とりうぐうとは、につほんとからのやうにとなり、ごくでつゞいてあるだろうから、しんだものをうみかかはへながしてやるのは、ぢごくごくらくへ「ふなまはし」にしてやるやうなものだから、十まんおくどをすた／＼いこふより、なんと「ふなまはし」のほうがせはがなくてよいではあるまいか。

なるほど、これはよいおもひつきだ。そふしたらひよつとそのながれてゆくどざへもんが、りうぐうのひのみへでもひつかゝつたら、りうぐうのさかなどもが、あれ／＼ひのみどざへもんがひつかゝつたと、につほんのたこのきどりでふるんへいをかけるやら、さぞおほさはぎであらう。

（傍線、アルファベット記号筆者）



『諸国道中金草鞋』第七編
（早稲田大学図書館蔵）

「越中立山参詣紀行」と「羽州最上郡羽黒山」ともに、一九の地獄観は一貫している。それは上記翻刻中の傍線部ａとｂの「地獄は地の底にある。それゆえに山中に地獄は存在しない」という点である。さらに言うならば、「越中立山参詣紀行」においては、「…ほんとうのぢごくは、ぢのそこにあるといふから…」と伝聞の形を取っているのに対し、「羽州最上郡羽黒山」では、「…ぢごくはぢのそこにあるではないか…」と断定している。一九のこの地獄観の移り変わりは如何なる理由によるものだろうか。

またこの時代の戯作文学者の特徴として、実際に自分の目で地獄の存在を確かめて見なければ気が済まないという、実証主義的な意識を持っている点があげられる。このような特徴に関しては、近世後期の戯作文学者、上田秋成(1734～1809)にもみられる。彼は『春雨物語』において、親兄弟を殺害し盗賊に成り下がった主人公の樊噲が、自分の犯した罪の重さ故に死後に堕ちるであろう立山地獄を生前に見にいったという逸話を書いている。一般的に主人公の樊噲の行動、心の動きは、作者上田秋成の心情の到達点、つまり内面そのものをあらわしているといわれている[4] 一九もかつて立山に訪れたことがあるといわれている[5]。一九が自らの創作活動をとおして、あるいは当時の世相をみて実感した地獄とはどのようなものだったのだろうか。

さらに傍線部ｃにも着目したい。ここでは地獄と極楽の両方が地の底にあるとしている。源信の著『往生要集』によれば、「・・・初めの等活地獄はこの閻浮提の下、一千由旬にあり・・・」[6] とされ、地獄は人間界のあるこの地上から地下奥深くに垂直的な構造をとって存在するとされた。また『宝物集』は「・・・地獄ハ此外ニ野中、山中、海辺ニモ有也トゾ・・・」[7] としている。ところが一九は地獄のみならず、極楽までもが地の底にあるとしている。これはどういうことであろうか。このような地獄や極楽の位置関係に関する文献に、平安初期の景戒が書いた『日本霊異記』の「智者の変化の聖人を誹り妬みて、現に閻羅の闕に至り地獄の苦を受けし縁第七」[8] がある。これは行基を誹った罪で智光法師が地獄に墜ちる話だが、西へ向かって行った後に、行基が生まれ変わって住む宮殿に行く。そこからさらに北に向かって連れて行かれると、そこには地獄があったという話である。

山折哲雄氏は『日本霊異記』が描かれた時代について、天上界と地下界という垂直的な考え方、つまり仏教的な地獄観が当時の日本人にまだ十分浸透していなかったのではないかとしている[9]。このような一九の地獄観が『日本霊異記』の地獄観の影響を受けたものであるか否かは、今後検証していく必要があるが、古代からの様々な地獄観が重層的に一九の意識の中に存在していたのかもしれない。

さらに興味深いのは、死者を弔うため寺で葬式を行うのはお金がもったいないので、遺体を川か海へ流した方が良い。死者にとっても十万億土を歩いていくより、川や海へ流すことが「ふなまわし」にしてやる様なものだからつごうが良いのではないかという部分である。死者の魂を舟に積んであの世へ運ぶという考え方も、何やら古代の宗教行事を連想させるような非常に興味深い記述である。このような近世知識人の死生観や地獄観については今後、さらに検討していく必要があろう。

1－3. 現世を肯定する一九の世界観

ここでは、さらに「羽州最上郡羽黒山」の地獄に関する部分を見ていきたい。

地獄　　石刎

ちこくといふところいろ〳〵あり。いづれも火もえてけふり立、すさまじきおとしてしゆらのたゝかひのこゑによくにたり。これをぢごくといふ。道のいろあかきところをちのいけといふ。（中略）

ここがぢごくならゑんまさまがいそふなものだが、おにも見へぬはぢごくのあきだなと見へる。d　こんなところにたなをだしていよふより、わしはやつばりいまいるところがよい。おほやさまがよくてたなちんはせはばず、あんなところにいるのがごくらくといふもの。そふしてながやのしうがみな、ほとけがほしているか、しかしものまへになるとみな、なすときのゑんまづらになるからおかしい。

ぢごくのありさまを見てから、じやうど口へもどりて、いしばねといふに出る。じやうど口の三里下りさか道なり。

狂　つゝかなく　お山しまひて　うれしさは
　　ほつと息する　浄土口かな

（傍線、アルファベット記号筆者）

註：ものまえ：盆・正月・節句などの前
　　なすときのゑんまづら：済すときの閻魔顔、借りるときはにこにこしていても返済するときには不愉快な顔つきをする人情をいう

傍線部dの一節では、仏教的厭世観は全く見られず、むしろ「いまいるところがごくらく」だと、現世を肯定するような表現が見られる。しかし「いまいるところがよい」その理由は、大家が家賃の支払いをせかさないからだという。今までみたように一九は、しばしば作品中の登場人物に自分の地獄観や死生観などを語らせている。現実には家賃の支払いをせかさない大家などはいないだろうから、あえてこのようなことを書いているのだろうか。いずれにせよ、「カネ」「義理・人情」にしばられた近世の社会システムや当時の人々の行動・思考に対しての、刹那的な心情の発露であったのかもしれない。

ところで、近世後期の文学作品において、越中と出羽が同一作品中に関連して登場することが多い。『金草鞋』も前述したとおり「羽州最上郡羽黒山」の巻の中で越中立山がとりあげられている。また伊勢出身の俳人、大淀三千風は、立山に登拝した「立山路往」を収めた紀行文集『日本行脚文集』を著したことで有名であるが、元禄十四（1701）年には『三千風笈さがし』（愛知県立大学所蔵）を著し、立山地獄を茶化している。

一、立山や湯殿山にては、かならず泉下乃古友にあふときゝ、いかさま判官殿か弁慶坊にあふて、むかしをきかんと地獄禅定によばひけれども、今をこゝらにはうろたえてゐられぬやら、むかふ歯そつたる石地蔵と色乃くろいけふりならでは答ふるものさらになし。

月ひとり　涼しさうなり　地獄谷

立山地獄を茶化す風潮は、元禄頃にはじまったとされる[10]。「立山路往」においては山装束を身につけ、神妙ないでたちで登拝した三千風ではあったが、『三千風笈さがし』では一転してユーモラスな表現になっている。ここでも立山と湯殿山が登場している。さらに前述の上田秋成著『春雨物語』でも、主人公の樊噲は越中神通川の舟橋から出羽大沼へ向かっている。このように越中と出羽が度々、同一作品中に登場してくるのは、いかなる理由によるものだろうか。月光善弘、岩鼻通明両氏は、出羽三山には立山のような厳しい自然景観はないが、山中の地名や地獄の名称には、立山地獄のイメージが強く影響していると指摘している[11]。越中と出羽の関連性についても今後、検討していく必要があろう。

2.「立山へ行けば死んだ人に会える」

２－1.「越中立山参詣紀行」にみられる一九の死生観

「立山地獄」に堕ちた亡者が僧侶に対し、自分を供養して欲しいと肉親への伝言を言付け、やがて往生出来たという話は『法華験記』にはじまり、『今昔物語集』を経て『地蔵菩薩霊験記』『三国伝記』『宝物集』など、多くの書物に収められた[12]。その後、近世にはいると「立山地獄」が近世文学に解放され、その中で次第に変容していくと同時に、「立山へ行けば死んだ人に会える」という伝承も変容していった。まずは『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」の13・14丁目をみてみたい。

わしのだいじのかゝしゆが去年、とん死をしましたから、わしはのこりおしくてどふぞいまいちどかゝしゆにあひたいと思ひますところ、此立山へ参詣すると、死んだものにあはれる、といふことでござるから、わしはかゝあに会はうとわざ〳〵参詣しましたら、かんじんのかゝしゆは出ないで、わしがかりのある酒屋のおやぢの幽霊が出おって、これ〳〵きさまをまっていた。わしは極楽へいって仏になるつもりの所、はくしろのくめんができぬゆへ、地獄にまごついてゐる。さいはひ、きさまへ酒代のかしがある。それを今よこしてください、とさいそくせられやう、ことはりいってにげてかえります。立山へきてとんだめにあひましたから、もう〳〵こり〳〵といたしました。

「越中立山参詣紀行」の中でも最も滑稽な部分のひとつである。亡くなった妻に会うために立山参詣に来たのだが、妻には会えずに酒屋の主人の幽霊が出てきて、酒代の支払いを要求されるという笑い話である。前述したように『今昔物語集』巻十四の第七話、第八話では、女性の亡者が肉親に供養して欲しいことを伝え、それによって往生できたというのが主なあらすじである。特に巻十四「越中国書生妻死堕立山地獄語第八」では供養の甲斐あって妻が忉利天に往生すると、もはや妻の霊はこの世に現れなくなってしまった。

そして『善知鳥』になると、猟師の亡者は供養の依頼の言付けもするが、今一度妻子に会いたいと、強い執着を持ってこの世にあらわれ、子供の髪をなでようとする。かくも猟師の亡者がこの世に強い執着を示すのは、この妻や子に対する愛情ゆえのものであった。しかし供養のために手向けてもらった菅笠がかえって徒となり、猟師の亡者は子供の姿を見ることが出来ず、殺生の報いにおびえながら、ひたすら僧侶に救いを求め続ける。殺生を生業とする猟師故の、拭い去りがたい報いがもたらす悲劇でこの話は終わっている[13]。ここでは『今昔物語集』のときとは違い、亡者が現世に強い未練、執着を残しているのが特徴である。そうすると「越中立山参詣紀行」の場合はどうだろうか。現世に強い執着を見せたのは酒屋の主人の方であった。執着した理由はやはりお金で、酒代の貸しを払ってもらうということであった。しかもそのお金を使って極楽に行くという、いかにも貨幣経済の発達した当時の世相をあらわすような内容である。まるで地獄は現世と似た場所で、人間界の浮世と同じような場所であるかのようである。ここに近世、そして一九独特の地獄観があらわれているのではなかろうか。そういった意味では前述の「羽州最上郡羽黒山」の傍線部ｃの部分、地獄や極楽の場所を示す記述にも同様のメッセージが込められていると思われる。一方で肝心の「かゝしゆ」の幽霊が立山地獄にあらわれなかったのは、もはやこの世つまり亭主にはもう未練は無いということだろうか。

再び「越中立山参詣紀行」の次のエピソードを見ていきたい。

わしは又、よそのうつくしの後家とねんごろしてからもう一たびあひたいと此お山へ参詣しましたところ、地獄谷でその後家の亭主の幽霊にあひましたら、ヤレ／＼ひさしや、われは女房よりさきへしんだゆへ、かわいそふに若い女を後家にしたと案じていたところに、ひよつくりとしんできましたから、ヤレ／＼うれしや、かねてそなたとは二世のやくそくをしてあるから、まつていたと又、地獄で夫婦になつてなかよくたつしやでくらしますからあんじてくださるなと、女房がきさまへことづけをしましたとぬかしやァがったから、おもしろくもなんともない。わしも立山へ参詣ぞんをいたしました。　（傍線筆者）

『今昔物語集』など平安期の仏教説話で、あれほど地獄からの救済を望んだ亡者たちは、近世に入ると「幽霊」と名を変え、しかも女房が死んで地獄へきたことを喜ぶという、全く異質の存在になってしまった。最早、地獄は恐れられる場所ではなくなり、一九や近世後期の人々にとって、そこは罪を犯さずとも死後に必ず行くところで、現世と変わることのない生活が送られる、身近な場所になってしまったかのような表現である。「地獄で夫婦になって仲良く達者で暮らします」という表現も、非常におもしろい。『善知鳥』の成立した時代以降、激しい戦乱の時代を経て「この世こそ地獄」という意識が人々の間に広まった。それが近世にはいると、戦乱は収まり社会は安定したが、幕藩体制下の成熟した社会において、人々はかえって「カネ」「義理・人情」「イエ」などによって自由を奪われ、もがき苦しむようになった。「この世も地獄ならば、あの世も同じ地獄。死んだ後も何ひとつ変わらないのだ。だからこの世と同様、楽しく暮らそう」というのが、この時代の人々の死生観だったのではなかろうか。

2－2. 『金草鞋』「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」にみる死生観

『金草鞋』で立山は、ここで述べる「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」にも登場する。立山同様、出羽三山も箱根山も地獄のあるところとして有名であることは言うまでもない。ちなみに立山を舞台とした謡曲『善知鳥』ではそのストーリー上、重要な要素となっているのが「片袖幽霊譚」である。同様に箱根を舞台とし、この「片袖幽霊譚」を物語のモチーフとしている説話に「沈香合」がある。[14]

ここでは、「箱根山七温泉江之島鎌倉廻」の中の箱根山中の部分をとりあげる。

たび人

この山にもぢごくがあるが、わしがまへかたつたゑつちうのたて山へさんけいしたとき、たてやまぢごくでは、しんだものにあふといふにちがひなく、わしがひさしくなじんだ女らで、しんだのがあったが、その女らのゆうれいにたて山であつたから、これはめづらしい。そなた、今はどこにとうしてゐるときひたら、その女のいふには、わしは今、ちくせうどうへおちてゐますが、わしが今のていしゆは、かほはにんけん、からだはむまでござりますが、人がせわしてわしは今そこへかたづきました。せけんのたとえにもむまにのつて見よ、人にはそふてみよといふ事がござりますが、わしはとうぞむまにそふて見たいものだと思ひました。ねんがとどいてとう／＼むまの女ぼうになつております。地獄のさいのかはらまちにおりますから、おまへもはやにしんでたづねてきてくださりませとぬかしたから、大わらひだ。

そんならそのゆうれいは、むまの女ぼうになってゐるなら、大かたそのゆうれいのでるときには、どう／＼とそのむまがたいこをたたくであらう。

（傍線筆者）

『諸国道中金草鞋第19編』
（早稲田大学図書館蔵）

「馬には乗って見よ、人には添うて見よ」という慣用句をもとにした笑い話である。「越中立山参詣紀行」同様、地獄で夫婦になり幸せに暮らしている様子が描かれている。人も馬も死んだら同じということであろうか。一九の死生観がここでも色濃く反映されている部分である。

小結

以上、紹介してきたように、十返舎一九は『金草鞋』の中で、登場人物に仮託して自らの地獄観・死生観を述べている。それは近世後期という時代の世相を色濃く反映するものであった。今後『金草鞋』の研究は、一九の他の作品や、一九と同時代に活躍した作家の作品と比較しながら多角的に行う必要がある。

最後に「木曽路之巻」の一節を紹介したい。

とうげでこわめしをくつたら、しんだかゝしゆのことをおもひ出した。なぜなら、おらがかゝあのしんだとき、てらへやつたこわめしの代をまだもちやへはらはなんだから。

3. 十返舎一九著『諸国名山往来』について

３－1. 『諸国名山往来』の概要

十返舎一九が『金草鞋』を著したのが、文政11(1828)年であるが、その４年前の文政７(1824)年には『諸国名山往来』を世に出している。富山県立図書館が所蔵しており、題箋は「頭書名跡誌　道法獨案内　諸國名山往来」、奥付は「文政七　甲申年　正月發販　江戸馬喰町二丁目　森屋治兵衛板」、巻末に「十返舎一九撰」とある。

この「往来物」とは古くから手習いに用いられてきた教材である。丹和浩氏は、その学習の形態について以下のように書いている。「江戸時代を通して最もよく流布した『庭訓往来』にせよ、『商売往来』にせよ、その本質は消息の形態をとった事物の列挙である。これによって事物と事物を指す名称、それを表す文字を学習するのが消息文の学習とともに行われた古来の学習の型であった」[15]。このように全国各地の名山をとりあげた本書が、手習いの教材として一体どの程度利用されたのかはわからないが、早速その内容を紹介していきたいと思う。

３－2. 『諸国名山往来』の内容について

『諸国名山往来』は12丁、誌面上段は各名山の道中記のように、里程や山中の名所旧跡などの詳細な説明がある。ここに取り上げられている名山は、駿河國富士山にはじまり順に、下野國日光山、奥州金華山、出羽國羽黒山、越中國立山、加賀国白山、甲斐国身延山、肥後国阿蘇嶽、豊前国彦山、大和国吉野山、大和国大峯山、河内国金剛山、山城国愛宕山となっている。また下段に手習いのための漢文調の文章があり、ここでは、唐土崑崙山、峨眉山、補陀落山にはじまり、富士山、足高山、箕根山、筑波山、日光山、金華山、鳥海山、羽黒山、月山、湯殿山、

妙高山、赤城山、榛名山、立山、白山、戸隠山、浅間嶽、白嶺、身延山、秋葉山、膽吹山、比叡山、鞍馬山、愛宕山、大江山、大山、岩國山、阿蘇嶽、彦山、伊豫小富士、石槌山、象頭山、書写山、高野山、温泉嶽、吉野山、金峯山、金剛山など、数多くの山の名が取り上げられている。この数多く取り上げられた名山の中で、立山に関する記述は特に分量が多く、他の山を圧倒している。ここでは富士山、立山と白山の部分を取り上げる。

越中國立山
當山麓、岩峅寺
より二り、横江一り
頼血掛一り、芦峅寺
一り、湯川一り、此所の川
藤の橋をわたり垢里
場なり。是より美女杣
一り、此所に千手観音堂、
材木坂あり。熊野権
現、鷲のいわやそれ
より断罪坂一り、伏拝
一り、此所に勝妙の瀧と
いふあり。数十丈の大
瀧なり。それより桑ヶ
谷一り、桑崎権現の
宮あり。不動堂一り、
中津原一り、此所を弥
陀ヶ原といふ。右に薬師
が嶽と云高山あり。
その麓に温泉あり。
それより国見坂一り
此所にふた道あり。右は
姥ヶ懐、左りは市ヶ
谷道むかし若狭の
老鬼此所にて頭に角
を生じ化して石となる。
その石を姥石と云。其
所を姥が懐と云・むかし奥
州の者が此所にて形
変じ馬となると云。
それより森尻はや
山上也。市ヶ谷行道に
小鎖大鎖とて人それに
すがり登る所あり。それ
より獅子が鼻、愛染
明王、弘法護摩檀の
跡あり。それゟ室堂
此所ゟぜつてうへいたる
まで一り八丁、左りに三宝
崩と云山あり。右に根
尾社、天狗嶽あり。
此所に地獄道、おひ分
あり。参詣人室堂に
一宿す。それより絶頂
にさんげ坂、はらひ川、五
色の濱、あみだ堂、是
より草鞋をぬぎて
本社に参詣するなり。
本尊あみだ如来、ふ動、
垂迹は手刀雄命也。
それゟ別山、帝釈天
に参詣し、別上より室
堂へ出る道五十丁
大走、小走さひのかはら
玉戸の窟は所小窟
胎内くゞり、楊枝か嶽、
みくりの池、伽羅陀山、
地獄谷、血の池、剱の山

駿河国富士山
當山北面は山の脚
長く東西は嶮阻也
甲州より登るを吉田
口といひ駿州ゟ登る
を大宮口といひ相州
より登るを須走口
といふ。朝鮮兀良哈

より天晴たる時は
富士山近く身見ゆる
といへり。誠に三国無
双の高山なり

加賀國白山
越前の勝山ゟ三り
谷村此所に枚峠あり
登り一り下り三り牛首
一里窟番所一り天狗
窟二り堂森一り此所に
不動堂人家四五軒
あり。それより一の宿半り
一の瀧一り半此所に温
泉あり。それゟ檜木
宿此所に嶮難の橋
あり。髪刺の窟あり
白山三社ひねり瀧
二重の瀧、畜生谷
まなご坂それより弥
陀原三り別山伏拝社
大御所一り下り あみだ三り下り
別山四り下り 一のせきに
かへるなりと参詣の人
一のせきより案内を
もとめて行べし

『諸国名山往来』（個人蔵）

いわゆる三霊山の中でも、立山に関する文章の多さは群を抜いていることがわかる。ところで、『諸国名山往来』の内容は、『和漢三才図会』よりの引用がほとんどである。この点については、前述の『近世庶民教育と出版文化 －「往来物」制作の背景－』で、文政期に出版された一九の署名のあるほとんどの「往来物」で『和漢三才図会』からの引用が行われていたことが指摘されている。

そして、『和漢三才図会』利用の有効な点について、次の４点をあげている。

①できあがった往来物が享受者に目新しさを感じさせる
②短期間に量産が可能で執筆に手間やコストがかからない
③往来物による学習方法の伝統を踏襲したものができる
④百科事彙的性格や視覚的効果をそのまま採り入れることができる

『和漢三才図会』は正徳２(1712)年に寺島良安によって著された百科事典である。なお『和漢三才図会』は富山市立図書館翁文庫に全巻揃っている。このうち、巻第六十八「越後佐渡越中信濃」に越中についての記事、巻第五十五地部に各地の名山（立山の記事はない）の記事がある。この越中に関する記事はその後、数多くの出版物に引用されており、例えば菊岡沾涼はその著書『諸国里人談』で立山地獄に関する部分などを引用している。[16] そのため『和漢三才図会』をそのまま引用していること自体は珍しいことではない。比較のため、以下に『和漢三才図会』越中の部の一部を引用する。

岩峅寺より二里〇横江一里有頼射熊處、血掛一里、熊引血去處、有死出山〇蘆峅寺一里坊有姥堂大寶三年卯四月十二日慈興上人老母、卒于江州志賀、慈興自作母像、慶雲元年八月彼岸中日、為葬禮法式于令今然〇湯川一里又名勝妙川渡藤橋行人、取垢離處〇美女杉一里有、千手堂有、材木坂傳曰、昔欲建女人堂畧寄

材木。然其木、皆一夜變石。有熊野権現鷲窟、各一社傳曰、昔若狭小濱女僧、名止宇呂尼者、伴壮女一人童女一人推参女人結界山故、於壮女乍化成杉木、因名美女杉。斷罪坂一里彼童女怖不進、時尼尿而見其形勢、大罵其地為穴深不知、幾許其處名叱尿。・・・[17]

以下、『和漢三才図会』に登場する山中の地名を列挙すると、伏拝、勝妙瀑布、桑谷、不動堂、中津原、弥陀原、國見坂などから、室堂、絶頂に続いている。両方とも同じ登拝路を通っているので、取り上げられた山中の地名も同じであるのは当然としても、『諸国名山往来』の内容はほぼ完全に『和漢三才図会』からの引用である。

ただ、『和漢三才図会』は、文中に地名や里程、更に山中の様々な伝承を織り交ぜて記述しているのに対して、『諸国名山往来』は、地名と里程以外には「姥石」と「姥が懐」の伝承のみが挿入されており、しかもこれらの伝承は、地名の由来を示すために削除できない部分である。あくまで『往来物』であるということで、最低限必要な情報のみを提供しているのかも知れない。次に『金草鞋』をみてみる。

これより立山参詣道なり。岩峅寺から横江、ちかけにしでの山あり。うばどうあり。これは慈興上人の母のぞうなり。まいとし八月彼岸の中日に、葬礼のほうしきあり。それより湯川、称名川といふ登山の人、垢離をとるところ也。ここに藤にてあみてわたしたる橋あり。つりばしにてまんなかに板二枚をしき、そのうへをわたる。はしはゆれてめくるめき、わたりがたき難所也。

（『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」13・14丁目）

一方『金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」は山中の名所の案内や伝承、さらに狂歌や笑い話を詳細にかつ、バランスよく採り入れ、読み物として非常に読者の興味をそそるように作られている。また欄外には里程も細かく記入される丁寧さである。このあたりが一九が『金草鞋』が立山参詣のためのガイドブックとした理由であろう。[18]

両者とも『和漢三才図会』から引用によって成り立っているが、制作する本の目的によって、必要な情報を取捨選択しているのであろう。

おわりに

いままで紹介してきたように、十返舎一九は『金草鞋』や『諸国名山往来』で立山を取り上げている。特に『諸国名山往来』においては立山の記述にかなりの誌面を割いていることからも、一九が強い関心を抱いていたと考えられる。特に『金草鞋』では、近世に入ってからの社会の変化や世相をふまえ、独自の地獄観を展開していった。その際のモチーフになったのは、古代からの地獄の象徴「立山地獄」であった。

その地獄観は近世後期の人々に強く影響を与えたと考えられる。その例として式亭三馬の『浮世風呂』[19]をはじめとする文学作品中で、登場人物の何気ない日常会話の端々に立山が出てくる事でもわかる。それは明治期に入っても女流作家の先駆けである長谷川時雨[20]の作品にも確認できる。また安永年間の笑い話[21]にまで立山が登場している。

かように立山が人々の心の中に入り込んでいたわけだが、前述したように当時の人々に影響を与えたと思われる、この一九の地獄観・死生観については、一九の他の作品や、同時期の作家の地獄観も検証してから検討していく必要がある。これを今後の課題としたいと考えている。以上、多くのご批判、ご教示を給われば幸いである。

註

1）「立山地獄観」の時代による変容については、『文学にみる立山』（2012年、富山県［立山博館］）を参照されたい。

2）拙稿「浮世にみる立山観」（『文学にみる立山』所収、2012年、富山県［立山博物館］）、また堤邦彦「江戸の「あの世」語り－創造される他界－」（日本宗教民俗学会編『宗教民俗研究第二一・二二号』、2013年）も参照されたい。

3）拙稿「十返舎一九のみた「立山地獄」」（『文学にみる立山』所収、2012年、富山県［立山博物館］）

4）日本古典文学大系56『上田秋成集』(1959年、岩波書店)上田秋成作品の解説、24Pから以下に引用する。「･･･この物語ではつみ重ねた彼の人生の経験に従って、問題に理論的(倫理的)解決を与えんとしたのであって、彼自身に於ては人生の諸問題を考え考えての到達点であった。･･･」

5）この点については、先学の様々な研究があるが、今一度、検証の余地があると思われる。

6）日本思想体系６『源信』(1970年、岩波書店)

7）元禄６年版『宝物集』巻二（平康頼著、鎌倉初期、富山市立図書館蔵）

8）日本古典文学全集６『日本霊異記』(1975年、小学館)

9）山折哲雄『地獄と浄土』(1993年、春秋社)

10）久保尚文『越中中世史の研究』(1983年、桂書房)、久保氏は京田良志氏、廣瀬誠氏の論文を例に、「両氏は立山信仰史における“茶化し”の出現をほぼ17世紀あたりに求めておられるようである」としている。そして「こうした“茶化し”の精神の出現は立山信仰の末期的症状を示すものであると同時に、人々が中世的宗教世界から解放され、精神のルネサンスを迎えたことを意味する」と述べている。文中に比喩的表現が多く、配札活動そのものは近世後期になって盛んになった点を考えると、いささか首肯しかねる点もあるが、人々が中世的宗教世界から解放され新しい精神世界を構築していたことは間違いないであろう。

11）月光義弘・岩鼻通明共著『出羽三山の信仰－奥之院湯殿山を中心として－』(1995年)

12）米原寛「文学にみる立山－古代から近世まで－」（『文学にみる立山』所収、2012年、富山県［立山博物館］）

13）拙稿「『善知鳥』の時代をみる」（『文学にみる立山』所収、2012年、富山県［立山博物館］）

14）西村市郎右衛門『沈香合』（『新御伽婢子』巻五所収、天和３(1683)年、加賀市立中央図書館蔵）

15）丹和浩『近世庶民教育と出版文化－「往来物」制作と背景－』(2005年、岩田書院)

16）菊岡沾涼『諸国里人談』巻之三（寛保３(1743)年、富山県立図書館蔵）

17）寺島良安『和漢三才図会』巻第六十八越後佐渡越中信濃（正徳２(1712)年、富山市立図書館蔵）

18）前掲12。米原論文。参考に『諸国道中金草鞋』第十八編「越中立山参詣紀行」の序文の一部を抜粋する。

「･･･予、一とせ加越に遊ひて、祥（さいはひ）に登山し詣でたりしに、満山の荘厳奇異にして、実に人我を醒すの霊場なれば、信念のあまり、その光景をあらはし、遠境の人々、参詣の便となす事しかり･･･」

19）日本古典体系63『浮世風呂』（1957年、岩波書店）前編巻下102Pに次の記述がある。

「･･･無面目も程があらァ。何處の釣瓶へ引かゝつた野郎か、水心もしらねへ泡ァ吹ァ。コレヤイ、六十六部に立山の話を聞ァしめへし、あたまつからおどかしをくふもんかへ･･･」

20）長谷川時雨「流れた唾き」（『旧聞日本橋』所収、1971年、青蛙房）162Ｐ

「･･･あたしは味噌汁が嫌いなので、ぽっちりとお椀の底へよそってもらってもつい残す。とにかく祖母の目はあたしにばかりにそそがれているからたまらない、最後に、小言はいわずに「越中立山、無間地獄へ墜るぞよ」と、あたしのお残りへ白湯をさして飲んでくれる･･･」

21）小松屋百亀「富士山」（日本古典文学大系100『聞上手』所収、1966年、岩波書店所収、安永２年）

「若い衆大勢よつて御山参りのはなしに、「おらは越中の立山へいつてみたい」「おらは又湯殿も大峰も登って見たけれど、マアそれより、三國一の名山といへば、駿河の富士へ登って見たい」「ナアニ、おきねい。上つて能ければ、西行が下にはおらぬ」」